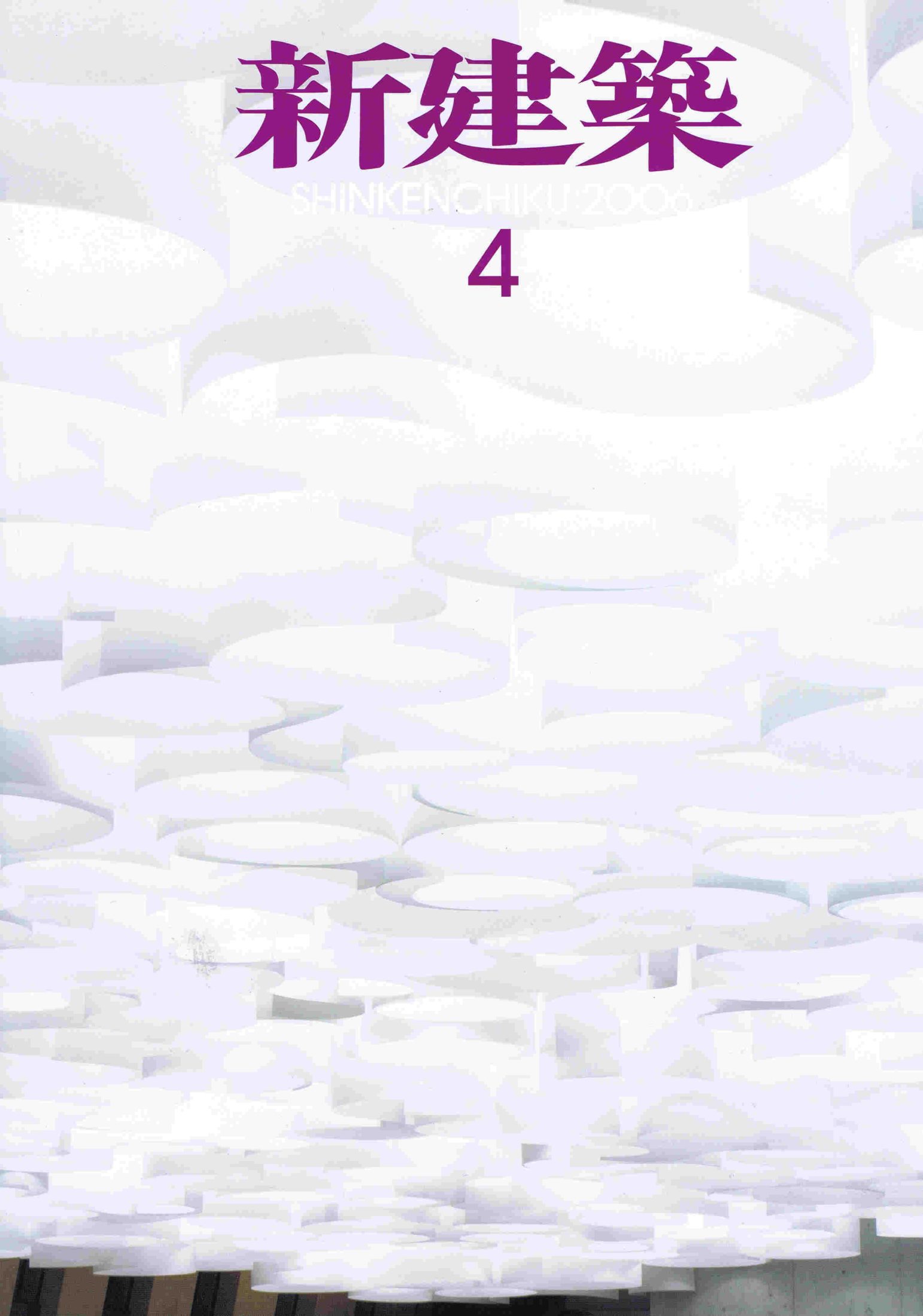
新建築

SHINKENCHIKU 2006

4



新連載

連歌 ランドスケープ

第1回　建築とランドスケープ

三谷康彦

ランドスケープアーキテクトとは何か？

僕自身はランドスケープアーキテクトだけど建築がとても好きだ．建築のデザインとランドスケープのデザインは似ているといえば似ているが，違う部分も多い．それでは，ランドスケープアーキテクトとはどんなものをデザインする職能なんだろう，そもそもランドスケープアーキテクチャーとはいったい何か？．また，ランドスケープアーキテクトはどんなものを見ているのか？などという疑問が湧いてくる．ランドスケープアーキテクトが扱う外部空間も，たんに建築と関係した外回りのいわゆる「外構」と呼ばれるものから，ランドスケープの要素として「建築」や「建築群」も扱う広範囲・広域的なもの，建築が入らないでランドスケープの拡がりを扱うもの，また「庭」スケールのものまで，空間的な幅は広い．

そこで，建築デザインとランドスケープデザインが似ている部分や違う部分，「建築家の見ているもの」と「ランドスケープアーキテクトの見ているもの」，あるいは両者の見方の類似点や相違点に関して考えてみる必要があると思う．

「連歌 ランドスケープ」と題した連載シリーズは，ランドスケープアーキテクチャーというものに関して共有の価値観を持ち，気心の知れたランドスケープデザインをプロフェッションとする仲間たち（戸田知佐，吉村純一，鄭雄男，石川初）との，僅かではあるが確かな共通認識をベースとしている．彼らとは，数年前に日本で立ち上げた登録ランドスケープアーキテクト（RLA：Registered Landscape Architects）という個人の技量を対象とした初の資格認定制度のための活動や議論を通じて，ある一定の認識や見解を得ることとなった．この仲間たちの，経歴やバックグラウンド，個性や人柄によって微妙に違うランドスケープに対しての考えをうまく繋ぎ合わせながら，ランドスケープというものを「立体的に」俯瞰して行きたいと思う．俯瞰にあたっては，日本の伝統的詩形のひとつである「連歌」の形式で，ランドスケープを多様な切り口で見ていきたい．ランドスケープアーキテクト（以下LA）として個性的で多才な仲間たちも次号から順次登場し，ランドスケープに対しての考察を加えることになる．

「京都迎賓館の庭」と「MFOパーク」を比較しながら

まずは，京都のど真ん中の京都御苑内に建つ「京都迎賓館の庭」（本誌0507）と，スイス・チューリッヒの郊外オーリコンという町の元インダストリアルエリアの再開発地区にある「MFOパーク」（Oerlikon Machine Factory Park）のふたつのプロジェクトを横並びで眺めてみたい．

これらふたつのランドスケープ空間は，それの立地する国籍やその背景となる歴史性・気候風土性も違うし，その空間の使用目的もまったく異なる．当然のことながらふたつのプロジェクトは，まったく違う表情を持ち，日本文化と西欧文化，伝統とモダン，庭園とパブリックパークと，対極の作品のように見えるが，そこには意外な共通項も見える．

一般的に，建築家はプロジェクトに取り組むにあたって，その土地の持つ固有の歴史性や社会性，文化性をスタディし，それをひとつのヒントとしながら意匠を練りはじめる．LAも建築家と同じようなスタディを行なうものの，敷地そのものは大げさにいえば「仮に切り取られた」地球の一部でしかなく，その中だけで完結させようとすることは少ない．つまり，建築を含んだ敷地空間を取り巻く「場の持つポテンシャル」も上手く活用し周辺の環境と折り合いをつけ，外部空間の拡がりを考えながら意匠的な課題を解こうとする．

しかしながら，こういった建築家とLAというふたつの職能を分離して，それぞれの職域の相互補完の上にプロジェクトが成り立つという考えは，例えば「京都迎賓館」や「MFOパーク」のランドスケープを見れば，今や古典的なステレオタイプになりつつあるように思う．

「建築」と「ランドスケープ」，どちらがコンセプチュアルに先行するにせよ，地球環境への配慮や歴史・文化の尊重は，今や洋の東西を問わずいかなる創造的なプロフェッショナルにとっても避けては通れないものになっている．加えて，建築家とLAの空間に対する見方，捉え方に関しての相互理解，それにも増して「内外空間」「庭」「ランドスケープ」に対しての「価値観の共有」というものが必須となってくる．

「京都迎賓館の庭」：ランドスケープ的建築

「京都迎賓館」は，日建設計という組織事務所内での「職能」や「役職」の違いを超えて，ふたりの建築家（中村光男と佐藤義信）とLA（筆者）の，デザイナー同士の空間に対しての価値観の共有に加えて，施主の絶大なる理解があってはじめて今ある姿になった．

もっとも引き渡し時には，工期という条件下で一応の竣工形としたものの，その後も継続してクサヨシ・ショウブ・ヒメガマなどの湿生植物やスイレン・ガガブタなどの浮き草を導入した．また植物は着実に成長をはじめ，またアイガモの親子が住みついたり，アオサギが鯉を狙いに飛来したり，トンボが卵を産みにくるようになって，庭としての変化のプロセスを始めている．

ランドスケープというものには本来的に「完成」というスタティックな状態はなく，常に時間の経過と共に変容するダイナミックな存在なのだ．

日本には「庭屋一如」という言葉があるそうだが，迎賓館の内外空間はまさに読んで字のごとし．「建物」と「庭」と敷地外の広大な御苑の緑の連続感，また御苑の緑と東山，北山，西山連峰への空間イメージの広がりによって得られる自然との一体感そのものが「庭屋一如」の源となっているし，そのことがこの館「迎賓館」を訪れる賓客に安らぎを与えることができる所以である．

一般的な庭園のスケールをはるかに超えるダイナミックな石を四国から運び，ランドスケープサイズのアカマツを群馬から移植し，原寸の塩田の堰門の柱に使われていた瀬戸内島石の花崗岩や，埋文発掘立会い時および建物基礎掘削立会い時に出土した1万年以上前の旧加茂川氾濫原の砂利を池流れの仕上げ材として再び新たな命を与え，風景をつくっている．あたかも以前から存在

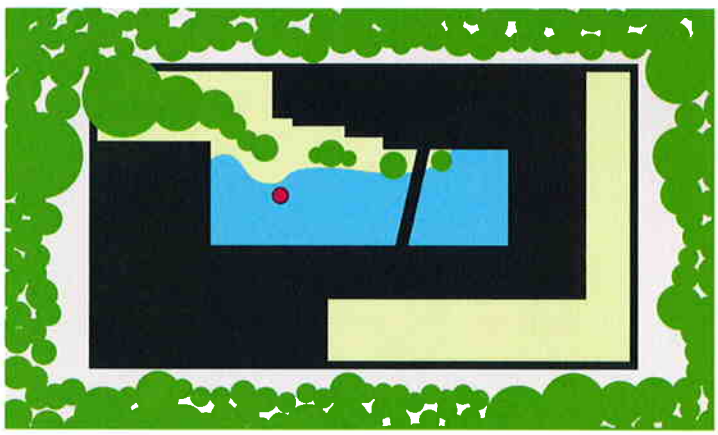
大滝の47tの巨石からの水落ち．水は巨石の前後左右から流れ落ちる．
左頁背景写真：池の表面水のオーバーフローを兼ねた瀬戸内海塩田で使用されていた堰門の石柱と船着場．

トワイライト・タイム．行燈のような建物からの灯りが水面に揺らぐ暖かいお出迎えの表象．撮影：本誌写真部　鈴木研一．

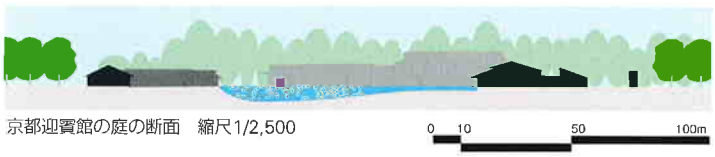
京都迎賓館

所在地　京都市京都御苑内
設計　建築　日建設計／中村光男　佐藤義信
　　ランドスケープ　日建設計／三谷康彦
建主　内閣府
企画・設計監修　国土交通省大臣官房官庁営繕部
敷地面積　約20,000㎡
設計競技　1996年
設計期間　1996年10月～2001年3月
施工期間　2001年11月～2005年3月
撮影　特記なき写真　田中博

京都御所に隣接する国の国公賓などを接遇するための施設．庭園と建築は常に一体と考え，庭には大きく3つの「相」を与えた．迎賓行事のための簡潔で品位を備えた回廊の庭（真の庭），「清らかで豊かな水」を中心に構成した大池の庭（行の庭），深山幽谷を思わせ京都の庭園文化が色濃い主賓の庭（草の庭）．加えて，外周御苑のフルサイズの緑を敷地内に取り込み，背景とした拡がりのあるランドスケープ計画とした．



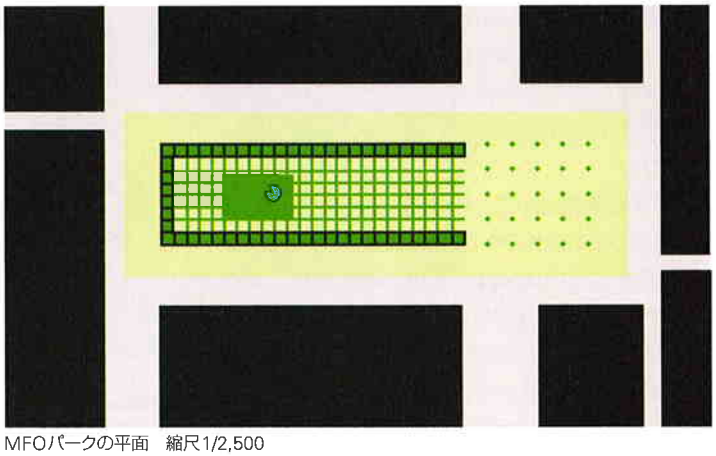
京都迎賓館の庭の平面　縮尺1/2,500



京都迎賓館の庭の断面　縮尺1/2,500

①水に縁のある場所にあった古石材を庭で再利用し新たな命を与える．②瀬戸内塩田堰門柱石と新たに原石を割り込んだ3本の瀬戸内海犬島産花崗岩のコンポジション．③古材の穏やかな石肌と新しい割れ肌のコントラスト．④座敷から目線が歩く沓脱ぎ石は矢で割られ，軒からの雨を受ける．⑤瀬戸内塩田堰門の笠石と旧五条大橋の橋杭石．いずれも水に縁のある場所にあったもの．

ワインボトル再生品のガラスの角を落とした美しい豆砂利を敷き込んだサンクンガーデン．巨大なメタル・ストラクチャー．時間の経過と共に登攀植物がストラクチャーを覆っていく．



MFOパークの平面　縮尺1/2,500

MFOパークの断面　縮尺1/2,500

0　10　50　100m

MOFパーク

所在地　スイス，オーリコン
設計　建築　ブルクハルト＋パートナー
　　ランドスケープ　ラダシャル・ランドシャフツアルキテクテン
建主　チューリヒ　グリーンシティ
建築容積　100m×34m×h17m
構造　鉄骨造+ワイヤーフレーム
階高　4階
植栽　100種類，1200株
設計競技　1997年
竣工　2002年
コスト　700万スイスフラン（6億3千万円）
写真・図版提供　ラダシャル・ランドシャフツアルキテクテン

オーリコンの再開発エリアの「緑のオペラハウス」と呼ばれる「MFOパーク」．都市のオープンスペースに対しての建築家とランドスケープアーキテクトの新しい提案．この計画は「成長」をテーマとし，環境が即席にできるものではないことを示唆．巨大なメタル・ストラクチャーは，1876年にこの地に建てられていた機械工場のボリュームを想起させる．

①カキツバタが植栽されたの鉄板製の「ハスの葉形」の池．切れ込み部分に立つと水の中に立ったような感覚．②竣工後間もないMFOパーク③架構にワイヤーで吊り下げられた，人気の的のデッキ部分．④架構の一番上部に設けられた眺めのよいデッキ．近くの山並みが見え気持ちよい．⑤秋には登攀植物が紅葉し，赤やオレンジ，黄色の葉が美しい彩りを添える．

したこの景勝の地に，平明な館が「図」としてふわりと着地した趣き．
庭というものはまぎれもなくランドスケープのあり様のひとつであるが，京都迎賓館の庭はいわゆる「和風庭園」ではなくてこの場でしかありえない，また，この場でこそ意味がある「ランドスケープ」の姿であると考える．
ここでの建築とランドスケープは強く共鳴しあう部分が多く，お互いにそれを増幅しながら影響を与えあう．そして，京都迎賓館は，正統で穏やかな気品と風格をたたえた平成の名建築となる．この建築はまさに「ランドスケープ的な建築」（The House in the Landscape）と呼んでも差し支えないだろう．

MFOパーク：建築的ランドスケープ

昨年の11月，スイスでの仕事依頼を受けた僕は，合間を利用してチューリッヒの「MFOパーク」を訪れた．このプロジェクトの第一印象は，まさに京都迎賓館とはまったく逆の「建築的なランドスケープ」（The Architectural Landscape）じゃないかと思ったことだ．
「MFOパーク」国際競技設計の優勝者である建築家ハインツ・モーザー，ロジャー・ナスバウマーとLAのラダシャル夫妻は，以前は機械工場が建っていた8,500m²の敷地に縦横100m×34m，高さ17mの構造物を，総重量290tの鉄骨，延長32kmにおよぶケーブルによって建ち上げた．グランドレベルには100種類におよぶ登攀植物を1,200株植栽し，これからじっくり時間をかけて，鉄骨スケルトンを緑のファサードで覆う計画．「自然」と「建築」をハイブリッド化した「巨大な緑のオペラハウス」とも呼べるモンスターを2002年に完成させた．
敷地面積自体は「京都迎賓館」敷地の半分以下だが，予想のほか大きく見えるのは，架構に透明感があるせいか．登攀植物を細いワイヤーに絡ませていることでも透明感を醸成させている．架構に囲まれた中庭から上を見上げると，空が気持ちよい．もっともこの部分にもフジが絡みつつあって近い将来には緑越しに空を見ることになりそうだ．そういえば京都迎賓館の庭は建物に周りを囲まれたいわば大きな坪庭で，大部分が池．そこに浮かべた和船から眺めた空の気持ちよさを思い出した．
また，パークでは870m²の木材とグレーチングによる回廊を架構の上下左右に用意，オペラハウスのバルコニーのように回遊しながらいろいろな高さや角度から内包された中庭部分が見下ろせる．グレーチングでできたバルコニーの途中や一番上の眺望が開ける部分にデッキによる滞留空間．日本建築でいうなれば，中座敷，奥座敷といったところか．遠景の山並みも，中景近景のハウジングや工場も，すべて含めて丸ごと庭になっている．
「京都迎賓館」も，内部庭側の回廊を雁行しながら巡ると，建築と庭のシークエンスの変化を楽しんでいただけるようにデザインしているが，回遊しながら景観の変化を楽しむのは日本の特許ではない．
「MFOパーク」では「時」という味方と共に登攀植物が確実に成長，4階建て相当の巨大なグリーン・ハイブリッド・ストラクチャーは確実に「実体」として立ち現れつつある．100種類ものテクスチャーや色合いの異なる登攀植物の年々の成長や，四季折々の葉色の変化や花色など，「時間」というランドスケープにとって大切な概念に十分に配慮した計画となっている．
「緑のオペラハウス」（と呼ばれている）のボリュームは，周辺に新しく建設されている中層の集合住宅のボリュームとほぼ同等になるように配慮されており，住宅建物のガルバリウム外壁などともよくマッチしている．ここがもし日本なら，公園だからやっぱり高木が一杯植わった，どこにでもありそうな空間構成になっているんだろう．それにしてもチューリッヒ市当局が，このコンペ案を選択した先進性はすごい．まさに，この時代，この場所，このやり方で，ここでしかあり得ないランドスケープ案を選択した市当局の見識には脱帽の……スキンヘッド（の筆者）．

「Inversion」「Decontextualization」「Hybridization」

ちなみに，「MFOパーク」の完成が発表される数年前の1998年に，スイス・バーゼル出身の建築家ジャック・ヘルツォークは以下のように予言的な発言を建築誌に発表している．

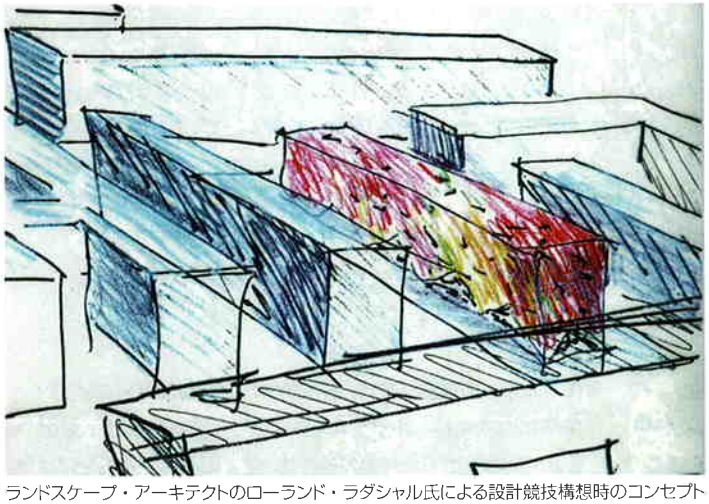
「どうやらわれわれ建築家にとって，自然を扱ったランドスケープ的な手法を，建築や都市開発の中で使用して建築と統合していくのは，もはや避けられない地点まで来てしまったようだ．都市での『建築的』な介在は，自然との協労を必然的に伴うことになる．それは破壊と修復である．ランドスケープやガーデンを介在させた建築は今後驚異的に増えることになるだろう．」

（ARCH＋142, July 1998より抜粋，翻訳は筆者）

実際それ以降，多くの先鋭的な建築家は，ランドスケープと都市や建築との，ガーデンと住宅との，そして自然と人間との上手く折り合う共存共栄の関係を，「Inversion（逆換，戻換，内外逆転させる）」，「Decontextualization（状況や関係を逆転させる）」「Hybridization（異業種の交配）」などといった新しい概念の言葉をつくって探し求めている．
また，建築家の「ランドスケープ的な建築領域」への探求はランドスケープアーキテクトの協力の有る無しに関わらず継続し続けているし，ランドスケープアーキテクトもまた「建築的なランドスケープ領域」への新たな探求を進めている．

（次回の執筆は戸田知佐氏です）

左：緑のガラスカーペットの上で憩う人びと．フジがストラクチャーを覆う．／右・左頁背景写真：ストラクチャーを覆うバラ。



ランドスケープ・アーキテクトのローランド・ラダシャル氏による設計競技構想時のコンセプトスケッチ。

設計競技時のラダシャル・ランドシャフツアルキテクテンによるコンセプトCG。

迎歌 ランドスケープ 執筆者

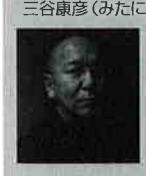
石川初（いしかわ・はじめ）

1964年京都府生まれ／1987年東京農業大学農学部造園学科卒業／1987年～99年鹿島建設ランドスケープデザイン部／1999年～株式会社ランドスケープデザイン／2005年～関東学院大学非常勤講師／R.L.A.登録ランドスケープアーキテクト

戸田知佐（とだ・ちさ）

1964年京都生まれ／1988年東京造形大学美術学科卒業／1997年ハーバード大学MLA終了／1988年～1995年大成建設開発部／1997年～1998年SEDO／1998年～オンサイト計画設計事務所プリンシパル／2003年～関東学院大学非常勤講師／R.L.A.登録ランドスケープアーキテクト

三谷康彦（みたに・やすひこ）



1947年大阪府生まれ／1970年信州大学農学部林学科造園学教室卒業／1971年京都大学農学部林学科造園学教室研修生修了／1971年～京都で造園・庭園を修行／1980年～米国東海岸にてJapan Landscape Architecture,Inc.／1990年　～Peter Walker事務所／1997～日建設計ランドスケープ設計室／現在，同社設計室長／R.L.A.登録ランドスケープアーキテクト

鄭雄男　（ちょん・うんなむ）

1951年神戸市生まれ／1974年五島慶太の作庭家・高村弘平に師事／1977年苑環境計画室設立／1986年苑環境計画　代表取締役／R.L.A.登録ランドスケープアーキテクト

吉村純一（よしむら・じゅんいち）

1956年島根県生まれ／1980年千葉大学園芸学部造園学科卒業／1980年～1990年鈴木昌道造園研究所／1990年PLACEMEDIA Landscape Architects設立／1996年～PLACEMEDIA Landscape Architects Collaborative代表取締役／1993年～千葉大学緑地環境学科非常勤講師，2002年～多摩美術大学美術学部環境デザイン学科非常勤講師／R.L.A.登録ランドスケープアーキテクト